

## 「両顔月姿絵」稽古本の初刊本

—常磐津政太夫直伝本とその周辺—

竹内 有一

常磐津節中期を代表する現行曲の一につ、「両顔月姿絵」（通称、双面）がある。日本音楽資料室に、その七行稽古本が四本所蔵されるが、その内二本の内題下に、「常磐津政太夫直伝」という珍しい銘記がある。本曲の劇場初演時の絵表紙正本（以下「正本」と記す）は未見であるが、政太夫直伝本に関して手持ちの調査カードを整理してみると、正本は次の（1）（2）に限られ、稽古本は他に見あたらぬ。この希有な諸本の書誌と、その周辺の事情を、紙幅の許す範囲でまとめておきたい。

（1）「梅見月恋闇思君」正本 無刊記だが、寛政九年（一七九七）二月都座上演時の刊行とみられる。板元は伊賀屋。東京芸大に二本蔵。本曲の稽古本は未見。

（2）「初桜浅間嶽」正本 無刊記だが、同年三月同座上演時の刊行とみられる。板元は伊賀屋。東京大・学黒木文庫蔵。初刊と推定される稽古本（日本音楽資料室・架蔵）は、直伝者無名。なお、再刊稽古本（同資料室・国立音大竹内文庫蔵）の内題下には、家元名義を標榜した「文字太夫直伝」に改変されている。同様の例は、兼太夫直伝本に多い。

（3）「両顔月姿絵」稽古本 無刊記だが、政太夫直伝の銘記により、翌一〇年九月森田座初演後まもない頃の初刊本とみられる。板元は伊賀屋か。日本音楽資料室に初印本二本、都立中央図書館東京誌料・

家蔵の後印本がある。四本とも表紙・奥付のない簡装で、私的な合縫本に含まれる。ついでに記しておくと、「文字太夫直伝」を標榜する再刊以降本は、多数現存する。安政頃刊とみられる再々刊以降本は「九刻」、その次刊本は「明治十五年九月再版」の刊記を付す。明治本は、その板本が現存し、近年まで印行に供されていた。

次に、各種上演史料をもとに、前掲三曲の上演時における政太夫の位置と、その周辺の事情をみる。（1）については、上演前に刊行される辻番付では、家元の文字太夫がタテ、政太夫がワキとなつていて、それより後に刊行される役割番付、正本表紙、そして常磐津家元内部で代々書き継がれた出演記録「常磐種」（東京芸大所蔵転写本）は、文字太夫を省き、政太夫をタテとする。「常磐種」の別系統本とみられる「常磐津年表」（音曲叢書・翻刻本）によれば、文字太夫は病氣のため、その弟の二代目兼太夫に、前月河原崎座の舞台を明け渡している。同じ理由によつて、政太夫がタテに台頭したか。

政太夫のタテ語りは、（1）が初めてだつたが、その背景には、当時表面化しつつあった、家元文字太夫と兼太夫との勢力争いが絡んでいたと考えられる。兼太夫は、すでに寛政七年頃より文字太夫と連名することなく、独自のグループで劇場出演を重ねていた。兼太夫直伝と銘記する正本・稽古本も多数刊行し、來たる寛政一年には、吾妻国太夫と名乗り、家元派を完全に圧倒する勢いで、別派を旗揚げする。

これに対して、いわば家元派の、文字太夫に次ぐ実力者が、政太夫であった。（2）の上演時は、

といった各種史料により、政太夫がタテ語りを勤めたことは疑いない。そして、その翌年の（3）「両顔月姿絵」の上演も、政太夫直伝稽古本の存在と、それを裏付ける「常磐種」の記録によれば、政太夫がタテであつたと考えられる。ただし、（3）の

辻・役割・繪本番付は、文字太夫をタテ、政太夫をワキとする。これについては、想像の域を出ないけれども、家元派が、病に伏した家元文字太夫の健在と指導力をアピールすると同時に、独自の勢力を拡大していた兼太夫一派に対抗するための伏線を敷く意味があつたのではないだろうか。つまり、公刊物である番付には文字太夫の名前を宣伝的に掲げておいたが、家元内部の備忘録である「常磐種」と、流儀内部に向けた刊行物である稽古本には、政太夫のタテ語りという事実を伝えておいたかと思われる。

政太夫は、（3）の上演後の森田座顔見世番付において、文字太夫の後継にあてられたとも見て取れる、「政太夫改常磐津左文字太夫」を名乗る。しかし、文字太夫の子息の小文字太夫襲名が、翌一年六月に内定（「常磐津年表」）するためであろうか、左文字太夫の名義は、わずか数ヶ月で取り消されたらしく、同一一年三月の森田座出勤時は、「政太夫改常磐津要太夫」（「常磐種」）と名乗つてている。その七月、約二年半の間舞台に出で病に伏せていた、家元文字太夫が死没。家元派を盛り立てるべき立場の政太夫も、甲州の芝居に巡業中の一〇月、四〇歳の若さで客死してしまうのである（「常磐津年表」）。「政太夫直伝」を銘記する本が稀少である背景には、このような事情があつた。

上野学園日本音楽資料室研究年報  
**日本音楽史研究**

第 2 号

**口 絵 梁塵秘抄断簡**

**序 言**

上野学園日本音楽資料室蔵「梁塵秘抄断簡」について

福島 和大

**論 文**

伝久我通光筆「梁塵秘抄断簡」と後白河法皇の書

山谷 一念

新出の「梁塵秘抄」今様断簡について

飯島 一彦

The Kogoo no Tsubone episode of *The Tale of the Heike*, examined in the light

of music history (英文本文／和文要旨・英語訳収録) スティーヴン・G・イレフン

山田流琴曲の歌本について ——「呂嬃箏譜」を中心として —— 谷垣内和子

**史料亮書**

應永一年六帖筆「維摩会表」並びに紙背の〔代集〕について

福島 和大

**講 演**

音楽史学と東洋音楽研究 ——王として日本音楽について—

福島 和大

12・13世紀の日本の宮廷音楽家をめぐって

福島 利夫

**史料点描**

「樂事記」堀川久民父子記・福島和大／「阿彌月交絵」稽古本の初刊本・竹内有

**桑入記**

大石秀高・篠一水絵／藤原孝博・篠一水絵／藤原義兼・青木洋志／

大森宗勲・神田俊一／堀川久民・一島曉子

**論 著**

岩田元一／岩佐美代子／中原昌由／篠一水絵／浦生美津子／福島和大／

岩佐美代子／相馬万里子／福島和大

**豪 論**

1999年

上野学園 日本音楽資料室